

先生没後、茫々二十年、今でも学旁窟に於ける先生の温顔、神道を語る時の熱誠溢るる声調、周辺の景など只懐しく、そして先生の高邁な御精神を忘れることなく、神道を奉ずるものの一員として、生きの限り努力を重ねたいと、遙か秋田の田舎より、先生の御霊前に御誓い申上げるものであります。

加藤玄智先生のこと

本会理事
國學院大學日本文化研究所長 上田賢治

私が加藤玄智先生に直接お目にかかり得たのは、確かに昭和二十年代の終りに近い頃、当時國學院大學宗教研究室に出入りしていた学生たちが安津素彦教授に引率され、箱根の山居をお訪ねした時、それが最初で、そして唯一の機会であったと思う。宗教学の先達で、特に神道を宗教学の立場から研究し、多くの業績を通じて、近代

社会に神道の持つ意義と役割とを有効に紹介された学者という、極く限られた認識をしか持ち合わせてはいなかった。

先生はその当時、最晩年。瘦身で上品なお顔立ち。がやがやと騒々しい学生たちにも眉根一つしかめられもせず、にこやかな温顔を崩されることも無かった。お話をなさる時はしかし、鋭い眼に光が射すという印象を私は今もなお持ち続けている。どのようなお話を承ったのか、確か神道宗教学会のために役立てようという考えから、重いテープレコーダーを携帯して行った筈なのだ、却ってこの機械のせいに違いない、お話の内容を今、宙に想い出すことは出来ない態たらくである。先生には申訳ないことだと深く恥入っている。

○

私が先生の学問に多少とも立ち入った理解を持ちうるようになったのは、先生による主著の一つ『神道の宗教発達の研究』に取組んだ時である。私が学部時代から宗教学を専攻し、その学問のためにアメリカへ留学の経

験を持っていたからであるだろう、小林健三、安津素彦
両先生から、自分の眼で批判的紹介を試みてみよとのお
勧めをいただいた。何しろ大著である。俗に行われてい
る批評のようにお座なりな事はしたくなかった。お申し
付けを受けてから何ヶ月の時間をこの作業の為に費した
だらうか。私にとっては一つの研究論文に値する重さを
今に持ち続けている論文となった。先生との縁りの深さ
を私は感じとっている。

この作業の途中で、私は一時作業の中断を思いつめた
ことがあった。加藤先生と神道の理解について、私には
根本的な方法論上の違いがあることに、気付いたからで
ある。私が思うことを正直に記述すれば、先生に対して
失礼なことにもなり兼ねない。婉曲な表現は、一層失礼
の度を深くするものに外ならない。私は執筆を断念して
小林先生にその旨を御通知申し上げた。しかし小林先生
は、加藤先生が学問的な批判に私情を動かされるような
お方ではない、むしろ後学の成長をお喜びになるに違
ないと、私の論文執筆を勇気づけて下さった。私は小林

先生と共に、加藤先生の学恩を深く感謝申し上げてい
る。

○

加藤先生は、いわゆる普遍宗教としてのキリスト教と
の対比の中で、神道の持つ宗教的特性を、学問的な理解
の原理に基づきながら明らかにする作業に、先駆的な努
力を傾注され、記念的な業績を残された。要語の一つ一
つに、その血のにじむような御努力が表現されている。

多少生硬さは残るといふものの、先生の発明創始された
要語は、直截で理解し易いと評してよいだろう。これは
先生の謹厳なお人柄が、そのまま学問の世界にも表現さ
れたからに相違ない。あの思想家、理論家にふさわしい
先生の御容貌が、連想されるといふものである。

私は宗教学から出発して、現在、神道神学に打ち込ん
でいる。御生前の先生に接し得たのは、ただ一回に過ぎ
なかったけれども、その史的学恩は広大であり、先生も
亦私の拙い営みを微笑みながら御覧いただいていること
と信じている。神道の研究が、ささやかながらも、道の

継承に貢献しうると念ずるが故にである。

加藤玄智先生の追憶

本会理事
富士文庫長

石川軍治

。東山湖畔の再会

戦後まだ日の浅い頃、ローカル紙に加藤玄智先生の消息が掲載されているのを発見した。

先生は昭和七年陸士の生徒時代の恩師であり、英語担当の教官として一クラス十四・五名を前に教壇に立たれ、試問の矢は当然のがれようもなくいかにしてその銚先をかわすか、心肝を寒からしめた不肖の生徒時代が思い出された。

早速御殿場市東山湖畔の先生の学労窟を訪問した。御在宅だった先生に快よく迎えられ一別以来の経緯を話し

あっている間に先生独得の語り口調が甦って来て懐かしく感ぜられた。

四方山話の末、富士文庫で機関紙を発行しているならば私の原稿をあげましょう。と申されたので有難く拝受することにして、爾来御健在中は毎月論文が届けられた。初めての訪問の際にも私が口述するから書きとり給えと申されて早速口述をはじめられた。特別筆記の用意もしてこないで持ち合せの手帳をひろげて書きとった。さながら学生時代教官殿の講義をノートしているようであった。先生の口調は次第にスピードが増し、横文字もとび出すのでまごまごしてはいられない。その後先生は健康に支障のない限り毎月富士文庫報のために寄稿された。その速記の役割は付きそいの杉浦女史が当たられた。

。杉浦女史のことども

杉浦女史は東山学労窟に於ける先生の助手をされていた。